

日本書紀傳 七卷中

和 一〇五二二號

十一

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 ( 21 )
函號	85 1

内閣文庫



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



文政  
幸  
印

青政  
庫

青政  
庫

青政  
庫

陽神問陰神曰汝身有何成  
 耶對曰吾身具成而有稱陰  
 元者一處陽神曰吾身亦具  
 成而有稱陽元者一處思欲  
 以吾身陽元合汝身之陰元

内一二六八三號

〇日本書紀傳七

〇四十一

ノリ タミヒキの スナハチ シタラキ ユキシラキ アメノ ミハヒララ ナキリクニヒナラクノ イロト  
 云爾即將巡天柱約束曰妹  
ヨリ ヒタリ シラヒ アム ノリタヒ ミギリヨリノクラト スデニ ヒテ アレ ノケリテ  
 自左巡吾當右巡既而分巡  
アヒ アヒシラキのヒル アヒ スナハチ イブ ノリ シハハ アサヒ エヤ エ  
 相遇陰神乃先唱曰妍哉可  
ヲト コ ヲトのヒコ ガミハ ノケミ ミコクハシタヒヤ アナヒ  
 愛少男歎陽神後和之曰妍  
エト エ ヲト ヲトのフヒヒ ノリア メ ヲト ヲツ  
 哉可愛少女歎遂爲夫婦先

ウミタヒヒル ヲツの スナハチ ノデテ アシ アネニ テ ハナチヤクニヒキの フキヒ  
 生蛭兒便載葦船而流之次  
ウミタヒヒル アハ シモラの マ モ ガルナリ マク イラ ヒモノ アズヒ  
 生淡洲此亦不以充兒數

陽神向陰神曰汝身有何成耶云々ハ正書ハ同ト  
 陽神向陰神曰汝身有何成耶云々ハ正書ハ同ト  
有リ然レトモ 彼ノハ 以 磯 馭 盧 嶋 爲 国 中 之 柱 ヲ 引  
 續々陽神左旋陰神右旋云々ハ事又唱和ハ御事を  
載テ其次ハ此希向對ノ事有ハ 次第ノ違ハレを此ハ  
 載々其次ハ此希向對ノ事有ハ 次第ノ違ハレを此ハ  
古事記ハ此ト同ト見立天之御柱見立八尋殿ト  
 古事記ハ此ト同ト見立天之御柱見立八尋殿ト  
有リ次ハ於是向其妹伊邪那美命曰汝身者如何成答  
 有リ次ハ於是向其妹伊邪那美命曰汝身者如何成答

曰吾身者成云故以此吾身成餘處刺塞汝身不成  
合處而以為生成同土奈何有次天之御柱を往  
廻給ひ其より唱和す御事有て此と同しき一實不叶  
ひて共小宜しく諾ハるるあり然るハ此一書と古事  
記とハ全く同ト傳ふ  
る事己小上ニ詔々ハカシ備此の御向對の起ハ  
小天神より宜汝往而循之と勅任し給ハり一程ハ同  
土の未有ざりし時多れハ猶隱身小坐て泥土煮尊汝  
土煮尊と申しを磯取盧嶋を畫成給しよりハ泥  
沙小葦生ひ水涯小鶴鶴を捕て動物植物も漸成出  
べき勢あり此小於て顯身と現出坐る其御名を角楫

尊活楫尊と御名小負しけるを今茲小至て化作八尋  
之殿化整天柱と有事小依て大戸之道尊大戸之邊尊  
と申せるハ己小大御面の足ハ一給ひ大御靈の賢く  
整ひ坐る小依て面足尊惶根尊と稱奉る可き頃不  
小至て陽神の大御身小餘有を陰神の御方小不足  
ハ如き處の有て成り坐る事の不審しく異在る事小  
祈思し坐るハ此小至て向明くめさせ給へる者  
右の泥土煮尊汝土煮尊と申す以下の御名ハ皆此  
二神の次に負坐る所由慥小考ふ事有て傳五卷小  
乘しく云るを此の事實小富て曉  
る時ハ露も疑ふ所無くむ者  
○吾身具成記傳四  
一十小成るこハ初生初より漸く小成て成畢れ

其水著給て成  
宣ハるなり

少を云ふに有か如く備具成字を古より成ると  
訓不就て考ふ二神の大御身の具成坐る後、神も人  
夫婦ミコトメノコト適合し同トく人體を生ハ常の事して殊更  
小作成さて形質ハ足ハ整ふ者あるを未此固土も何  
も未有ぶ少し始ふて此二神の大御身の成る事ふ  
ハ少縁の事も非ゆけむと所思なり傳曰高皇產  
靈尊神皇產靈尊の下ニ註せるハ如く拾遺集歌小君  
見水ハ結ふ神不恨めしツレテ人何を造りけむと  
有て神身ハ人身ハ其大神の造出し給ふ傳あるハ然  
る物して此時小始て二神の御身を結ひ作りしハ

人體の規矩の定り出る時ある故ハ今世ハ人の生れ  
て長ふる事の何の事も無か如くハ非ず甚容易く  
ぶる程を想像の奉る可し然れハ其造給ふ天神の御  
方よりハ那須ふるを其ハ函ウラして顯カモシふハ二神の御身  
の自然ありて成り水も如くあり故ハ那理といハ云  
う若て具成を成ると訓て語を重ぬれりハ記傳ハ変  
察而行而ふ云時ハ唯人を恋ハ道を行く事あるを  
志し而行く而して云てハ豫てなり今ハ直る義有が如  
く此の成るに豫め成初るより漸く今ハ  
至て成整ひ訖る義ふるを知り  
小雌元と有る其小云う傳六九傳此ハ古事記と同ト  
傳ふれば彼記ハ吾身者成る不成合處一處在と有か如

く有けむを正書し状ふ合せて文を被換はる者あり  
可し備不成合處と成餘處と對ふ陽神の御身  
の具成て成餘水の計ふ具足は坐るは合せてハ  
陰神の御身の未成足ハざるか如く言を推くして申  
させ給ふ者あり 人ハ見事過て云も吾片方  
あてハ足合ぬ如くあるを其人  
を得て事ハ足る意を以て阿布て云を以て知て一記  
傳四ハ不成合處とハ缺て漏ハぬ如くある處を詔へ  
いして有ハ事しうくハ具成てハ有也 ○陽元ハ正書ハ  
雄元と有下ハ之り 傳六九  
十 此も古事記ハ我身者成  
て而成餘處一處在と有る如くありハ此事右ハ陰元  
の例あり記傳四 二十  
一 ハ成餘處とハ贅ハ出て身外ハ

贅ハるか如くあるを詔へりて有か如く備此ハ陰神  
の未成合と由ハ宣へる對て具成て成合  
が上ハ成餘水ハ處ハ出來れり由ハ若あり 然れハ此  
の所ハ御  
紀ハ陽元陰元と直ハ其處を指宣へるよりハ大  
御身ハ成合ハ一状を以て傳へたる古事記ハ方ハ  
む甚ハ雅びり ○思欲以吾身陽元合汝身之陰元云爾  
ハ古事記ハ此吾身成餘處刺塞汝身不成合處而以  
為生成国土奈何と有ると同ハ所あるハ成餘處不成合  
處と有を陽元陰元と云換はる耳なり但此文古訓ハ  
如く 訓ハ 吾身能陽元衰汝身能陰元ハ合世武登思欲登云  
爾 訓ハ 然れハ陽元を唯ハ衰能汝自來陰  
元を賣能汝自來と耳訓ハ言足ハ

古くも登許呂と云語を加へて不有で上ふ  
 有祿陽元者一處と有祿陽元者一處と有を字を  
 甚く約めたる者有り云爾を字に任ふは漢文訓に成るなり  
 此ハ瑞珠盟約章第二書小凡五男神云爾と有は同  
 トと語末の助辭小置たるは有れども此ハ登詔給  
 比伎と訓で然無てハ語調ハ毎云布と訓ハ僻  
 事より其ハ漢文多し時ころハ有れ假令此御記  
 を漢文様小力めて書れよりハ訓迄を昇く爲し事  
 ハ大神學を任として任ハ即特巡天柱ハ二神ハ陽元  
 と陰元とを合せ夫婦と成給ハむ爲小先天柱を巡  
 ると給ハむとあり次小分巡相遇と有は是なり  
 此事傳六  
 分巡下小事ハ約束曰ハ古事記ハ吾與汝行迴逢是  
 註とあり

欽明天皇二十三年御紀小約束  
 軍計と有を知識  
 政理年須夫と訓  
 訓ハ瑞珠盟約章第二書  
 小此此約束と有ハ知識と訓  
 此小同ト

小史學指而小立法拘制謂之約束と有ハ  
 此ハ伊弉諾と訓ハ  
 釋云訓ハ和記曰向  
 下之三君我意味此  
 妹誘和也此ハ伊弉諾  
 之味是問字ハ何故讀  
 各異或答此字有兩  
 訓也若正相對而言  
 則謂和言堂若違而  
 相言則謂和違也  
 各隨義讀前故字同  
 此ハ右ノ説ハ左ノ傳  
 以左右ノ説ハ

天之御柱而爲美斗能祿具波比如此云期云と有ハ  
 如ハ記傳四二下不知岐流ハ行先を懸て云ハ爲むと  
 云因るありと有ハ然る事して名義抄ハ約束を言哀  
 佐年ハハ勉厲尙須と訓即其意より男女の語相  
 を爲て夫婦と成を契を結ぶと云ハ是なり  
 或説  
 末蓋手搔也云ハハ何ちの事十一書ハ陰神先唱  
 曰云ハ便搔陽神之手遂爲夫婦と有を合とて説と  
 通ハ其ハ其ハ傳小論ハハハ○妹自左巡吾當右巡ハ此傳ハ主意より  
 ハ有れども猶申多し難在り其ハ古事記ハ依小伊邪  
 那岐命詔汝者自右迴逢我者自左迴逢約竟以迴時伊  
 邪那美命先言云ハ各言竟之後告其妹曰ハ女人先言不

良と有て此却柱廻り事ハ伊邪那岐命の指揮に依て  
其次第に於てハ違ハズ物爲給ひしうども唱和の御  
時不當に伊邪那美命の先御言擧爲給ひけるが御過  
ふと故に天神の御言も因に先言而不良亦還降致  
言て宣ひて御廻り順次の違へる由不宣給はず又次  
小故尔及降更往廻其天之御柱如先と有るに上下小  
貫さす少異義無ければ今其不從不可但斯事  
上文を書  
としし其前後に相協する状ふ文を調ふる事なり  
ハ其も依難しと云思ふ人ハ有るが如く此も  
天神の御言ハ婦人之言其已先掲字に有る文ハ  
故に二神改復巡程に有る打合ざる所有れば此事耳ハ  
古事記及正書の方正しうる可し古史徴ハ此一書  
を取て先ハ男神ハ右より女神ハ左より廻給へる

を此度ハ改め廻り坐る由は是深き由有る傳ふ  
ゆと云水も水も古史傳ふど其深き由ハ説いた  
るむを未其書世ハ出されハ予ハ知ず備此神廻り左右の定め宣へるハ  
陽神ハ神心ある故に始より陽神ハ左陰神ハ右ハ  
廻逢給へり此事不就て却廻り無ハ如何と云ハ傳六  
六下ハ己ハ註るが如く天柱を國中の樞機シキと爲て天  
地の左旋右動ハ神習ハせ給へるが故なり舊事記ハ  
ハ傳ハ取れりとも然る深き思氣無くして此一書  
唯此文を擧げたる耳ハて此ハ論の外なり  
○既而分  
巡相遇ハ正書ハ分廻國柱同會一面と有る同ト舊事  
紀ハ二尊如約巡行天柱會逢同處と有る備此ハ既  
而ハ古事記ハ約竟以云と有るが如く豫め其約束を



公正書小却更相遇  
とも有り但更相  
遇を来具理阿比多  
麻比奴訓也此  
然訓雖れれ小字  
如阿比阿比多麻  
時訓也一傳身相

△天孫降臨章  
第五一書ふ  
研哉吾皇子者  
聞喜音而生之歟  
と有り

竟して然其事小移之辞より加久はあとも訓也所  
尔志氏云事允ふれども獨字如く既  
當れ心より相遇公共小遇給ふて相相見る  
相會ふ相思ふふと相小共小其事を爲合ふ由  
ふり遇ハ廻遇セるふて此々御合坐るふりさる事右  
小引る文小同會一面又會逢同處ト同ト事あり○陰  
神乃先唱曰上傳六卷六出十四下○研哉ハ下小此云阿那  
而惠夜ト註され神武天皇御紀小研哉此云鞅奈珥夜  
ト註也也給へ共小同ト事あり此事已小傳六意  
哉ト説ト共小合ト註セるが加ハ此研字を被用たる  
ハ名義抄小字流波志ト夜須志ト加保與志ト

與志ト訓を註される其義を取らぬる者あり  
記傳四小字書小研麗也ト美好也ト注せりト云  
れり小克合り或説小研可愛皆好也ト有リ然可  
○可愛少男歟第十書小可愛少男字ト有テ語  
末日歟ト字ト異れり耳あり然れども愛衰登古衰の  
衰小當れり字あり事傳六六十九下小註セる事共を考へ  
て曉る可ト正書小為字を被用たるが如此ト同  
ト言を様ハ小字を當テ記されり正ト衰小當  
テ遣小其ト定難ト故ふ可ト字書小字多疑而未定  
歟句絶之餘声加對人説語而實之者ふ之辞或爲尚語ト云ハ  
云云意を取れりト衰の義小非ず○後和之曰ハ  
乃先唱曰の對あり東市司式小不和字を阿麻那波受

已有れば和之を阿麻那比氏と訓てきしや然る人  
の言を熟く兼引くを然云れ此御事向の御事小就  
てハ似着ハハハ所思ゆるあり然れども人の怪しむ  
くむ事の傍痛き小依て許多幣氏と訓つ先唱曰の事  
云れ此ハ此傳六小已  
小ハ擧げず  
○遂為夫婦を都比爾美斗能麻具波比斯  
氏と訓て小從ふ可く遂とハ二神唱和の御事ハ此小  
有しとどハ其先後の違ひり云事近ハ所知者す  
終小爲夫婦の事小及べりハ蛭児淡洲寺を生成し  
給ひハ御心の如く有るハ故小下小故還復上詣  
於天云くと有て古事記と總てハ同ト傳あかき右の

妹自左巡吾當右巡と有て此所ハ異ふ傳あり又  
正書小ハ陰神の御言先立給ひハ時小ハ御合ハ爲給  
ハずて吾是男子理當先唱如何婦人及先言事既不  
詳宜改旋於是二神却更相遇と有て其時ハ御合坐す  
て直小改旋給へるハ後度の時を以て始適合爲  
夫婦とハ有て此一書又第十一書ハ遂爲  
夫婦生淡洲次蛭児あり有てハ異なり  
ハ各言竟之後告其妹曰女人先言不長雖然久美度迹  
興而生子水蛭子云と有て女神の御言先立給ひり  
る事小祥ハハハハハ思ふハハハハ御合坐ハ水  
蛭子淡嶋ハ生坐しハ小依て愈其事と思ふハ定めり  
天小參上て天神の御命を請給ひりハ由ふれハ此傳  
りハ彼方正實小契合て甚く愛れハ右ハ細書小引  
正書小如何

婦人先言字あり有ハ可美クハ有ルハハ餘リハ言痛  
ク文を成さレハハ故ハ又其文謬ヲ爲ハ古義を失ハ  
レハハ可惜然ハ此一書ハ傳ハ元ナリ脱レハハ  
ハハ考ハ然ハ非ズ御紀ハ例同ト事ハ正書一書  
共ハ並ニ記スレハハ有リ又正書ハ一書ハ必  
有テ事ハ何レハ其片方ハ譲リテ事略クレハハ  
此彼見レハ正書ハ任由レハ省レハハ者ハ  
各其ハ随ヒテ文を成セハ者ハ故ハ此ハ右ハ古  
事記ハ如キ文ハ不意ク脱レテ傳ハハ有ハ然  
レハ御紀ハ神代卷を讀ム者ハ各一聯ハ文ハ意得テ  
此處ハ彼處ハハ心を及ガハハ全ク神代紀を

得ル事ハ甚難在ル可クハハ○先生蛭見ハ第十七一書  
ハハ生淡洲次蛭見ト見エテ此二傳共ハ全ク同クハ  
状アリ然ルを四神出生章ハハ日神月神ハハ生坐テ  
素戔嗚尊ハ生坐テ先ハ次生蛭見雖ハ三歳脚猶不立  
故載之於天磐椽樟船而順風放棄ト有ハ蛭見を神ト  
思違ハハ誤ルハハ己ハ此ハ正書ハ陰神先唱曰  
陽神不悅曰云々事既不祥宜以改旋於是二神却更相  
遇ト有テ其時湊合坐スル趣ハハ蛭見ハ傳ハ四神出  
生章ハ在ハ故ハ省レハハ者ハハ  
備其章ハハ日神月神  
蛭見素戔嗚尊ト四  
神ハ生坐ル件ハハ故ハハ予ハ蛭見ハ神ハハハ  
事ハ傳ハ考得テハ八洲起元章ハハ出レハハ取テ彼章ハ

その諾ハ、さる事多し己不其章神傳有  
る故不四神出生章と云ふ名目耳ハ用ふる者あり見  
む人怪しむ 同章第二書ハ日月既生次生蛭見此見  
可く 満三歳脚尚不立初伊弉諾伊弉册尊巡柱之時陰神先  
兆喜言既違陰陽之理所以今生蛭見云々次生鳥警櫂  
樟船輒以此船載蛭見順流放棄と見えたる此ハ甚心  
得難事あり其ハ巡柱の時陰陽の理不違ハせ給  
へるハ依て事多し此ハ先立て生給ハ神月神あり其  
小月アリ給ふ可き其より後ハ成生ハ神ハ其報の  
至くむ事ハ理不於て有り々々事多し又正書ハ天  
警櫂樟船鳥警櫂樟船共ニ後人ハ思違ハて記せらる

るを取りれ、る者ありて決めて僻説あり可し  
十一段ハ樟ハ速須佐之男命ハ木種を殖生ハ給へる  
時ハ吾子ハ神同ハ浮宝有りずハ佳くとハ詔ひて  
御眉毛を板散ハ給へるより始て生れるハ木ハ也ハ此  
ハ此神ハ殖生ハ給へるより始て生れるハ木ハ也ハ故鳥警  
櫂樟船ハ云々樟ハ以て船を造る事ハ始りて後ハ云出  
々々傳ふるハ云々ハ云々ハ實ハ然ル事ハ世始ハ不警  
櫂樟船ハ云物ハ有り 其第一二書ハ大日靈尊月弓尊  
素戔嗚尊ハ三柱坐て蛭見ハ事ハ見えざるハ第六第  
十一等ハ一書ハ伊弉諾尊勅ハ任三子曰云々と有り甚  
正ハ傳ふる者あり古事記ハ得三貴子ハ有り中  
小水蛭子ハ収めるハ古語拾遺ハ次生日神月神最後  
生素戔嗚神ハ耳出たるハ思ふ可し  
然るを舊事紀ハ始り此ハ一書

又古事記の文を取合せて陰陽始遣合為夫婦產生之  
兒即是水蛭子此子入葦船而流也次生淡洲亦是不入  
字例也記あが日神月神素戔嗚尊の生坐る其  
後小次生蛭見雖己三歳而脚尚不立云々と右の第二  
一書を其任小出せ蛭見の固く神小の坐卜正しく國  
なりと云所由の古事記小依て説て先於其嶋天降  
坐而見立天之御柱見立八尋殿と有る於能喜呂嶋の  
二柱神計り位坐る小嶋あり八尋殿を見立給ひしと  
雖も未神等を生て令位給ふ可き地無し故小天  
神の修理固成是多陀用幣流之國と詔言給へる御命  
の任小國土を作成むと思ふしなり其の以吾身成  
餘處刺塞汝身不成合處而以爲生成國土奈何伊邪那

美命答曰然善と有る水蛭子淡嶋より始て國々嶋々  
を生給ひつる事を記し然後小既生國竟更生神と判  
然ヤ小文小思を被別なるを以て彼記小女人先言不良  
雖然久美度速興而生子水蛭子此子者入葦船而流去  
と有る文の混々しき故小神々々むと誰と思ふ  
ぬる事ふら以爲生成國土と上小宣へる國土の中  
の一ある事を曉る可し但入葦船而流去と有る誤不  
書共小雖己三歳脚尚不立と有る葦船の正書一  
小脚の葦ありて三歳の間蛭子の其嶋あり葦あり生  
立ぶなり謂ゆる不毛の地あり傳ふるを被此取傳  
めて葦船と云事小成り又其葦船如何なる故小磐  
椽樟船の事小及傳其蛭見と云ハ何水の國々むと

公之天下... 蝦夷... 此... 又

考る小此ハ景行天皇神紀ハ渡嶋ト有る其小テ今ハ  
蝦夷千嶋ト云地方を云ふ此を蛭児ト云定る  
由ハ俗ハ蛭子字を延美須トシ延美須ト訓事ハ  
何ハ依テ何ト云字義有テ然云事ト知ル所ハ  
人ハ用ヒテ怪シクハ却テ文字違ノ事ハ始ル  
程ナリ古言ハ比流古ト云其蝦夷嶋ト事ヲ知テ  
其訓ト定メテ用ヒ慣ルハ故ナリ察知ル所ハ我  
心を定る小至ルハ然レハ蛭児ト云ハ神代ナリ  
古名ナリハ陸奥國ハ屬ル海を隔テ有故ハ渡  
嶋ト云ハ神武天皇ハ大御代ハ放ル奉ル

愛洲詩ハ高ハ主領ル地ナリ故ハ蝦夷嶋ト云  
小テ不有ル 愛洲詩ト云名ハ神武天皇即位前ハ  
兵而出先撃八十島師於國見云云歌之曰愛洲詩鳥  
此債利云々有テ其八十島師ハ事ナリ此今思  
寄ルハ説有テ陸奥誌記ト云書ハ記セテ彼國三春城  
主何信氏ハ傳説ト云麻志麻治命神武帝ト十餘年相  
戦ルハ安日長體ハ兄弟字麻志麻治命ト隨ハ終  
帝膝給ハ長體ハ帝ハ弟兄を討ル故ハ誅ト云  
日ハ東北ハ進放ル卒度濱安東浦を領ル此未葉  
小安東ト云者有テ齋明帝ハ時安信比羅夫夷人追討  
小下又此ハ從テ功有テ因テ安信姓を賜ル云々  
有テ御紀ハ趣テハ少異ル所有レト安日ト云者  
を卒度濱ハ放ル云云事亦ハ事ナリ其ハ彼國邊  
ハ蝦夷ト云者ハ古多ク背ナリハ安日ハ齋  
少者ハ後ハ一民共を云ハ本ハ後ハ東北ハ  
國ト云テ朝命を奉ル者ト云ハ蝦夷ト云テ後ハ  
ハ背ル者ハ字ハ如クハ成ルト云ハ若クハ御紀ハ愛  
洲詩ト有ハ右ハ安日ハ指ル所ハ可ハハ蝦夷

元章四神出生章小且少<sup>ハ</sup>左<sup>カ</sup>右<sup>カ</sup>も傳へたる者あり  
 世少<sup>ハ</sup>時より違ひ初たる者あり此誤より以來古  
 人の雖も蛭児ハ神々人々彷彿し少<sup>ハ</sup>故小ハ洲起  
 元章四神出生章小且少<sup>ハ</sup>左<sup>カ</sup>右<sup>カ</sup>も傳へたる者あり  
 備此蛭児の生出たる始ハ洲<sup>チキ</sup>渚の如くして泥沙の未  
 固くすし有し少<sup>ハ</sup>其地小相應たる葦ふとの生ぬ  
 可きを其年と然らず翌年より何の牙も無く三年の  
 向<sup>ソラモ</sup>其土毛日成行きを待試に給てり少<sup>ハ</sup>葦尚生  
 立ぶる計ありハ況て其他の草木もどり生出べくも

天孫降臨章  
 小天稚彦門前  
 所植湯津柱木  
 と有る下小植此  
 云多底葦と見  
 元古今集小女  
 即此影護人  
 行過る男山  
 小一立りて思ふ  
 小又詞書曰小具  
 所小立りけり梅  
 小或事傳八脚猶不其  
 下云云

此の如くは、  
 此の如くは、

非トと思ふ一捨給へるあり下ハ順流放棄と有る照  
 一應せて曉る可一釋紀六下小元肥美之地葦草多生  
 と有る以て其不毛の地たる事を思ふ可く少<sup>ハ</sup>物  
 小立ると云ハ真木の生る地を横立つ山と云ハ杉の生  
 る地を杉立る内と云ハ如く少<sup>ハ</sup>生立ると云ハ  
 を唯小立ると云事 右の如く葦を脚と云上下の違耳  
 例有て古言あり 右の如く葦を脚と云上下の違耳  
 少<sup>ハ</sup>其語の同ト故小国を神と混るとなる一種の  
 傳ハ出来たれども葦尚不立の故事の然為か小亡ハ  
 竟<sup>ハ</sup>少<sup>ハ</sup>故小其葦小依ハ葦船の説も出来又其ハ是  
 少<sup>ハ</sup>成て磐楪樟船もどり事少<sup>ハ</sup>成れ少<sup>ハ</sup>者あり如  
 此ハ考定めて掃除け削正せば殘る古文ハ順流放棄

有をよあふ脚尚不立より續くる小義理甚明く  
 ありが此小依て説を爲す洲渚の地は在るは三年  
 迄葦尚立ざる耳あり船をたたく漂ひ浮て居止るたたくは  
 流るる順に放り棄給へるは是此下小不以完見歎  
 と云ふ所コトノモト次あり然れハ水中に位む虫名曰蛭元來  
 なるは其名を成りし者なり記傳曰小水蛭子ハ  
 上代小水蛭似た見を云し蘇なりと云れりハ  
 其本末違へ故二神の御言の如く蝦夷嶋ハ今も不毛  
 地よあり稻穀を生出ざる地あるを以て魚を以て常食  
 と爲る事皇國の瑞穂の如く新井君美が書る或書ふ  
 云く蝦夷嶋の世の始老なる夫婦來住て在ける小食

物の甚乏しく有けるに神有り告て云く此物を以て  
 大海を攪探して食物を獲ると教ふ覺て傍を見小舟  
 の楫一枚有けり夫婦教の如く楫を以て海を探けりハ  
 白く淡立つ下より魚多く浮ニ出ニる此を捕て食物  
 と爲たるが始りて今世迄傳ハれり此魚ニ鯖ニ鯉ニあり其  
 夫婦の末蕃息ありて今も嶋人の出來れり彼二人が位  
 江刺と云地小老夫を神として祠れるを惠美須と  
 云ひ老婦を姥神と云ひ共小社を建て嶋人此を祠れ  
 取意以上と有る嶋人の説ありて全ク傳ふハ非れども此  
 云る老夫婦云く小事ハ二神の磯馭盧嶋を畫成り給

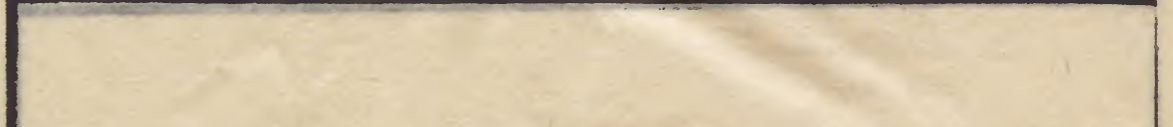


へりし故事を記れり者ありて信難事あり其嶋  
の始を二神小係り云ふは蛭児の事小因り云ふは備  
魚物を食物小教給ふ已小国土たる上ハ謂ゆる蠢  
化云々状小人種ハ生出たる時ハ事小此ハ二神  
小ても有てし老夫を神と爲て祠れり小惠美須と云  
ふハ神号あり非ずし蛭児と云其地ハ神と云事小  
此等考合せて蝦夷嶋ハ始ハ二神小起り事小  
知てく二神小起り云々眼ハ着たりしハ何事小  
時何事小依り云々云事小探索めずハ有て  
らざ如此くおる時ハ葦尚不立ハ説ハ彼ハ始食物ハ  
て思ひ定む可くあるむ 蛭児ハ名義放子あり可し其  
生産を字年と云ハ可美ハ字麻と云々同ハ意小

文原齋和名此  
留り布多志利

物ハ蓄息ハ事ハ美祢云々由ハ言ありを二神ハ御心  
より外あり御子あり故ハ見教ハ小亮給ハざし  
流るハ順ハ放棄給ハ計ハ事ハ故ハ放子ハ宣ハ  
りハ者あり今俗ハ山人ハ子を生ハ事ハ言ハ  
子を放るとも子を放出さるハ云ハ同ハ事あり備  
此蛭児ハハハ女神ハ御言先立給ハハハ御手違ハ  
事ハ背て生ハハハハハハ故ハ可美國ハハ成ハ  
て不足ハ成ハハハハハハ者あり然ハハ世ハ言ハ過計ハ可  
畏ハ者ハ非ハハハハハハ所以ハ式ハ祝詞ハハ事ハ不遇ハ  
例ハ深江輔仁ハ本草ハ和名ハ蠶ハ此ハ流ハ註ハ和名  
抄ハ本草云水蛭和名此流ハ見ハ病ハ久曾此里乃也

萬比名義抄ノ民を幣比流又放屁をの事と爲る予が  
 然訓れを以て放ふ當て比流説の強ざる事を  
 明く曉 ○載葦船の古事記小此子者入葦船而流  
 可く ○有少記傳四三十一小葦船ハ阿斯夫泥と訓て此  
 船を纂疏より以葦一葉爲船也と有り然し有り又  
 葦を多し集めて棚を作るとあり有りて彼無向堅向  
 之小船を思合す可く ○有少 万葉十一十二の巻に  
 生茂りたる中を榜行し船の事あり別より通証二  
 小詩河廣葦の一葦航之蕪東坡赤壁賦縱一葦之所  
 此小ハ與つて 右小考定めて脚尚不立ハ葦尚不  
 立ありと云ふ如く蛭見ハ不毛の地にて葦ありと  
 生立ざりてを思ふ思ふて放る一葉給ふ古傳



△但今野見を蝦夷島と云ふ事其の出来は...  
 又古説をも姑く助け云ふ其島を其の出給ひし神  
 をと蛭見といふ可く其島人の云傳小昔造島神の此  
 島を立して神去給ひ有後ハ南於嶺神國より女神一  
 柱葦舟に乗て漂着しけり其地ハ都那神と云傳  
 小右角の當りて其舟破れけり其舟の載る所  
 の室ハ黄金白銀木器五行器乳鉢鉈子瓦鏡金打盤等  
 をハ丘の上よりけり九日も風雨を降く小室無く食物を求  
 る小田無して飢たりけり何故か其小室の確丸ありて  
 神の近き心有り小尾を振つて先導として伴心行けり  
 小室殿空を得たり此小室に入り野の所て木葉を  
 小室の所より...

事多し小依て古くも葦  
 船と云ふ誤傳ハたり  
 有て或ハ天磐楹樟船或  
 誤ある事を曉る可く  
 説曲て甚可畏く有り  
 宜しく打棄てく小此  
 知給るくありて人  
 遣伎と訓る其然る可く  
 二一書ハ順流放棄と有

萬比名義抄ニ尾を幣比流又放尾をの事と爲る予ガ  
と然訓らるるを以て放し當て比流説の強ざる事を  
明くる也  
○載葦船ハ古事記六三此子者入葦船而流  
本と有し記傳四六下葦船ハ阿斯夫汪と訓て此  
船を纂疏六以葦一葉爲船也と有り然し有るあり又  
葦を多し集めて棚を作らるし有り彼無向堅向  
之小船を思合す可しと有り  
萬葉十一十二の巻に  
葦別小船と有り葦  
の生茂りたる中を擄行く船の事ふり別より通証二  
小詩河廣葦舟一葦航之蕪東坡赤壁賦終一葦之所  
みど云を引くは  
此小の與々々ぐ  
右小考定めて脚尚不立ハ葦尚不  
立ありと云るは如く蛭見ハ不毛の地めて葦ありと  
生立ぶありを思と思ふて放るる葦給てし古傳

△但今蛭兒を蝦夷島ありと思定たる説の出來れるは就て

又古説をも姑く助け云む其島と共の化出給ひし神  
をも蛭兒といふあり可し其島人の云傳小昔造島神の此  
島を作立て神去給ひ有後乃南於葦の神國より女神一  
柱座舟に乗て漂着ゆける其地を都那神と稱葦船あり  
小て右角の當りて其舟碎破たりける其舟の載る所  
の室ハ黄金白銀木器玉行霽乳鮫子蛭兒金を打盤等思違  
を山丘の上よりけれども風雨を防ぐ小室無く食物を求  
る小田無して飢たりけり何故か其の確たるありて女  
神の近づき心有りげ小尾を振つ先導とて伴ひ行けり大  
る聖殿空處を得たり此の出入り野の海に木葉葉葦葉  
て小魚物海藻を與へ或心の入り野の海に木葉葉葦葉葉  
びて飢を助け露命を救ひ傳細細を逐ひ米の葉を  
乃めり終ふ男女二人の覺を覺て清水を認み其舟を空し  
故小今をさすやて島人の言傳に直道なり其舟を  
事あり偕女神ハ自著齋の細衣を法て着て給ひし知給  
小其見既に是より山野を馳奔する海邊を奔走して海角  
い樹木の登るると其所に尋神常の人の異ありけり若  
て其衣と書置果ければ本神等其地を煉成て放棄す此第  
を承し瀑し木は布を制衣し何都志と号して是を載送  
して其兒の著しめ給ゆるは彼雄た棹葉海藻を喰へて  
授る小隨ひ此二人の子も生長して夫婦と成り子を生しより  
子孫大島中の蓄息せり所以に各其家の室と爲るハ金銀  
を粧れる大カ短カ又ハ平竹耳盤ワケシカネ 龜子益等何れ  
京師風を好む事ありと云り然らば其女神ハ蛭兒島と共ハ  
成れる神ありを彼島を流棄給へると其其地靈神おれハ  
葦舟ありて流れ給ふ事の有り此の島と神と二方傳  
ハれりあり有りぬべき

事あり小依り古くも葦  
船ありハ誤傳ハたり  
有て或ハ天磐櫓棒船或  
は出米

萬七名義以ノ毛を帶七統  
 又放屁を<sup>二</sup>の事<sup>一</sup>と爲る予が  
 用て此流説の強ざる事を  
 記ふ此子者入葦船而流  
 那阿斯夫泥と訓て此  
 船也有り然も有り又  
 あり有りて彼無向堅向  
 万葉十一十二の巻に  
 小葦別小船と有葦  
 船の事あり別より通証二  
 坡赤壁賦後一葦之所  
 定め脚尚不<sup>レ</sup>葦尚不  
 不毛の地あり葦ありと  
 放る一棄給へり古傳

又放屁を<sup>二</sup>の事<sup>一</sup>と爲る予が  
 用て此流説の強ざる事を  
 記ふ此子者入葦船而流  
 那阿斯夫泥と訓て此  
 船也有り然も有り又  
 あり有りて彼無向堅向  
 万葉十一十二の巻に  
 小葦別小船と有葦  
 船の事あり別より通証二  
 坡赤壁賦後一葦之所  
 定め脚尚不<sup>レ</sup>葦尚不  
 不毛の地あり葦ありと  
 放る一棄給へり古傳

美處を離りて位不  
 爲る意あり

の有りむを其流に振らて一事をいふ依て古くも葦  
 船と云名の有を此に收て載葦船とごり誤傳へたり  
 一者より其の蛭児を神と思違へたり一記れ事  
 あり故に其船の事も猶惑り有て或は天磐楳樟船或  
 は鳥磐楳樟船とも似着り<sup>一</sup>るる僻事ありし出来  
 りると思准りて此葦船の誤ある事を七曉る可し  
 但神紀の文を己が心で任ふ説曲て甚可畏く有り  
 故に正しく其説の立つ事を定しく打棄てくべし  
 故に正しく止事を得ざる事あり我が心を南きて此正  
 實を明らめ令給ふ神ころい知給ふらめんて人  
 信不信不抱<sup>一</sup>る  
 可事ありず  
 ○流之を放遣伎と訓る其然る可し  
 四神出生章小順風放棄其第二一書小順流放棄と有

此より起りて流罪の事を放つて、空總塔院に於て此放遣、事記に流を有る記傳  
して、流野の眞菅の云、濱松中納言物語に公の罪せられ給ひ  
て筑紫に放たれ御在せし、源氏頼朝の御時、流罪に於ては、  
めども侍るゝハ、狀異なる罪の當り可きハ、侍るふれ文選  
九の既放三年不得復見、と有り、又能流流也、と源氏具合、  
此の流之ハ、假字を  
小俊茂ハ、割しき浪風の瀧に知れぬ、故に放たれしを、  
徳山守留麻の人此の放たれ來、備前拾遺、流の調、  
流ハ水ハ任、下方ハ下  
小海を往來し、小西しき風ハ放たれて、此島ハ來れ、  
却言排坐、と有る、却を夜理と訓、大殿祭詞別、待防掃  
宣日却を夜禮と訓る、是より此の流之ハ神逐小  
逐給ふ事あり、流字を放遣、被用ハ、崇神天皇  
にて被用、御紀多し、流離を佐須良布と訓る意  
ハ有、其所を移して、其居を替るを流と云、○淡洲ハ  
淡薄く少き地、名より一嶋ハ名より、非るなり古事

記ハ淡嶋と作て此傳と同一く水蛭子の次ハ在を第  
十一書ハ、生淡洲次蛭見と有、異ある傳あり、但本  
路洲と有る路、字ハ行あり、今改て引つ、又第九一書ハ  
ハ淡洲を大八洲の中ハ入たる、殊ハ異ある傳ハ  
ハ又第六一書ハ、先ハ淡路洲、淡洲瀉胞と有、大八  
洲の中ハ入ざるハ、宜し、水ハ淡路洲ハ其外ハ  
爲るハ、傳、傳今淡洲と名ハ同ト、者諸國ハ多在、  
伊國讚岐國因防國、志摩國、伯耆國、出雲國、越後國、  
小在ハ、皆此淡洲の中ハ、猶此外ハ、有、先記伊國  
あり、古事記、高津、言段、大市歌、ハ於志、  
岐由伊傳多知、和賀久近美禮、  
志摩云、母美由と詠、  
給へる是より神名式ハ

志摩云、母美由と詠、  
給へる是より神名式ハ

流之字ハ古事記ニハ流也ト有テ古ト也ト字ハ換ルル也ト流也ト此ノ流之ヲ切假字を所テ備流之を放遣使ト訓ル流ハ水ノ任下方下却ふルノ夜流ハ却ル証ハ大殿祭詞別ニ待防掃却言排坐也ト有テ却を夜理ト訓メ大被詞ハ被却止宣メ却を夜禮ト訓ル事ト是ル此ノ流之ハ神逐小逐給事多ク流字を放遣被用タルも崇神天皇ト被用ルル微令ニ流人トも流移之人ト有テ其所を移シテ其居を替ルを流ト云○淡洲ハ淡薄ク少ク地ノ名ル一嶋ノ名ル非スル古事

同意ノ所ルル古事記ハ流也ト有テ記傳ニ公を棄ト訓ル事ト能其心を被得タル事あり事紀ハ古事記ニ如ク此子入葦船而流也ト有テ公ト也ト字ハ換ルル也ト流也ト此ノ流之ヲ切假字を所テ備流之を放遣使ト訓ル流ハ水ノ任下方下却ふルノ夜流ハ却ル証ハ大殿祭詞別ニ待防掃却言排坐也ト有テ却を夜理ト訓メ大被詞ハ被却止宣メ却を夜禮ト訓ル事ト是ル此ノ流之ハ神逐小逐給事多ク流字を放遣被用タルも崇神天皇ト被用ルル微令ニ流人トも流移之人ト有テ其所を移シテ其居を替ルを流ト云○淡洲ハ淡薄ク少ク地ノ名ル一嶋ノ名ル非スル古事

記ハ淡嶋ト作テ此傳ト同トク水蛭子ハ次ハ在テ第十一書ハ生淡洲次蛭見ト有テ異ル傳あり但本路洲ト有テ路字ハ折あり今改テ引メ又第九一書ハ淡洲ト大八洲ト申入タル事ト殊ト異ル傳ハ又第六一書ハ先以淡路洲淡洲為胞ト有テ大八洲ト申入タル事ト宜ク此トも淡路洲ト其外ト為ル事傳今淡洲ト名ト同ト者諸國ト多在少紀伊國讚岐國因防國志摩國伯耆國出雲國越後國ト在ハ皆此淡洲ト申メ猶此外ト有テ先紀伊國古事記高津宮改大市歌ハ於志流夜那尔波能佐岐由伊傳多知白和賀久近美禮津所波志摩能暮呂志摩云々母美由ト詠セサセ給ル是ル神名式

今丁方案三評子武庫  
 浦手傍時十舟浦浦美  
 背不見作之舟有ハ  
 根津國武庫浦を前  
 高北法路に紀伊の宮  
 多栗嶋背より地理  
 能合又七下は栗嶋不  
 許根傍護寺思病云  
 有ハ法嶋より其ハ  
 何を以知ト云ハ此歌  
 の次ハ能能出好不  
 意而又麻毛吉不川邊  
 之味能能山又足ハ過  
 而無虎乃山又名草字  
 之を詠ト云ハ紀伊國の  
 地名云ハハ

小名草郡加太神社と云る今海部郡加太村小在て俗  
 小淡嶋明神と申すを社傳に祭神少彦名命云々元  
 友嶋小坐しを加太村小移祭少備其友嶋の古名淡  
 嶋と云り云る是正説多し 具原篤信が諸州巡紀  
 家續けり淡嶋大明神の社有り此社ハ少彦名命あり  
 云ハハ加太村の同ト地云ハ其社ハ有ハ邊を淡  
 嶋と云後ハハ云ハありけり備被淡嶋を友嶋と云  
 ハ神代ハ淡洲ハ一ハ非ハ幾計ハ生坐ハ一故事ハ  
 じハ遺りト云名あり 讚岐云々ハ万葉四十六小天佐  
 けハ又知て云々 我留夷乃國邊尔直向淡路字過栗嶋字背尔見管と有  
 ハ記傳四 三十一 小淡路ハ西北方小在ハ嶋と見えハハ  
 有ハ然ハ事ハ淡路ハ西北方小當りハ百八十

の嶋と多く有ハ此栗嶋ハ其中ハ有ハ心云々ハ九  
 十三 小百傳之八十之嶋廻り傍雖來栗小島者雖見不  
 足可聞と有ハ栗小嶋ハ其同處多可ハ仙覺抄ハ讚  
 岐國栗嶋北去百歩許有嶋名曰阿波嶋と有ハ是云々  
 可ハ 予此安政元年宗諸す大坂より船あり西ハ下り  
 面ハ小嶋ハ見えハ向ハ向ハ栗島云々云ハ但此  
 ハ仙覺抄云々ハ列ハ向ハ向ハ又十二ハ浪向後雲  
 後ハ見 栗島之云々ハ有ハ紀伊 周防云々ハ万葉十  
 五十四 小周防國玖珂郡麻里布浦行之時作歌八首ハ  
 中ハ字波之麻字與曾尔也故非無ハハ字波思麻能安  
 波自等於毛布ハ詠ハ二首ハ決ハ其ハ 尾張人吉 田原房ハ

又或書小日向國  
那珂郡折道と云  
凌有り港口一  
の島と云ふ島回  
五六町有り社有  
鴨著淡島  
宮と云ふと云  
ふし其一あり

大同類聚方  
小西米島茶越  
後國船部粟  
生蝦夷等之家  
傳方と云ふ全  
此島を云ふ

山有り名  
と淡島

筑紫紀行と云書小安藝國忠海淡より船出た西南方  
一里計ありて海狭くありて小嶋多く有る邊を行く  
北に當り大嶋と云所人人家有る見ゆ南より大隅國  
河波嶋見ゆ此人家無しと記せし見ゆ  
大隅郡小淡嶋と云有る又神名式小志摩國答志郡粟  
嶋坐伊射波神社二座並同嶋坐神宇多乃御子神社と  
見え越後國ありハ磐船郡小島粟嶋是あり今此を  
訛りて  
青嶋とも云り然れども又伯耆風土記小相見郡  
物小ハ必粟嶋と書と云り  
家西北有餘戸里有粟嶋少日子命蔭粟芳實離て即載  
粟彈後常世國故云粟嶋也と有る宝劔出現章第六一  
書小見えたり淡嶋是あり又出雲風土記小意宇郡粟  
嶋有推招多年木又嶋根郡粟嶋周二百八十歩高一十  
小竹真塔木島

有招茅 又出雲郡粟嶋生海あり有り出雲小ハ三有  
茅部波 又出雲郡粟嶋生海あり有り出雲小ハ三有  
少右の伯耆あり少日子命粟を蔭給ひし依り  
粟嶋と云始たりハ如くありて淡洲あり  
一北に粟を蔭給ひたりあり此事ハ  
下小委し説明しむるを待てし右に如く予ハ記憶  
居て今記し出る粟嶋と云物其數十一有を猶國と小  
向水たりむあり幾計し有るを必粟嶋とせし云ハ  
ハ皆小嶋ありし就し思ふ小正書小處々小嶋皆是潮  
沫凝成者矣亦曰氷沫凝而成也と有る淡洲ハ小嶋  
ありけり二神ハ神代を過り大己貴少彥各二神ハ  
時小至り迄ハ潮沫水沫ハ凝聚りて大己も小己も萬  
國と成れり事已し傳六百五十ハ註しが如く然れ



皇國の地方は属する右十一計ありハ二神の大八洲  
國を生給ひし其を主と國堅め給ふ事ふし有け此ハ  
其淡洲と此淡洲と一と擬成  
合ふ可くは其ハ別あり其ハ何を以て云ふありハ  
鎮火祭詞に神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹妹二柱嫁継  
給ひ國能八十國嶋能八十嶋宇生給比八百萬神等宇  
生給比云くと見えたりは神紀より大八洲と異説も  
有る先古事記の教に合せて其餘より蛭児淡洲へ更  
なり越洲大洲吉備子洲をいれ十四あり古事記に  
ハ元伊邪那岐伊邪那美二神共所生嶋壹拾肆嶋と有  
る外に亦蛭子與淡嶋不入子之例也と有る此をも合  
せて其教十六あり然れば同ト神代の傳説より祝

詞と御史とよ斯る齟齬あり有るは必謂水有べき事ふ  
くむと年頃考ふる右の處々小嶋を充て國能八十國  
嶋能八十嶋と云ふ者ありけり若し神代の初を云事  
ありは故に後二萬國と成續ゆる迄ハ言擧すべし公  
然し其起ゆを然ハ傳たる者より有けり但右の蛭  
かハ見教に充給はば其を以て加して計へむ事ハ  
如何なるにせし祝詞ハ唯世の始を云所より故に然  
る差別違ハ云 脩生嶋神詞に皇神能敷坐嶋能八十嶋  
能者谷蟻能扶度極塩沫能留限狭國者廣久峻國者年久  
嶋能八十嶋墜事無皇神等能依奉故云と有る  
其鎮火祭詞を照應すれば嶋の八十嶋共々廣く年々



生始し當時ハハハハ實ニ處ニ小嶋ト云ベク状ニ有  
けハバ大八洲國を除テ滄海潮之八百重の限ニ國ト  
云國ハ全ニ無シト唯唯唯見の皇國の東海ニ在リ淡洲  
ハ粒トテ散ラシト西海ニ在耳ヲハハハハ潮沫水沫の  
凝聚シテ外國トハ成レリハ者アリ然ルを素戔嗚尊  
の天子の新羅ニ降坐テ彼邦を建給ヒハハハ始テ次  
ハ西方ハ南關ヲ往坐シ程ナリ漸クハ西蕃の國ニハ  
國形を爲メ至ルハハ者ト見由此事已ハ傳六ノ云ハ  
縣印度多トハ一大部を所自夜ト云ハハ淡洲を記  
ル者ト思由ハハ平田翁説ハ西蕃ハ天皇氏地皇氏  
ト云ハハ此二神を申シ人皇氏ト云ハハ素戔嗚尊ニ坐  
テ此神大九州を區別シ九域を立給ヒハ其大九州ハ

萬國を區別シハハ九ニ爲給ヒハハ漢多ク由ニ云ハハ  
ハハ然ル言ハハ皇國トシハ國能ハ十國嶋能ハ十嶋ト  
云ハハ異云ハハ若テ少彥名命皇國ナリ渡坐テ淡洲を經營シ  
給ヒリ宝劍出現章第六一書ニ其後少彥名命行テ熊  
野之御崎遠適於帝世郷矣亦曰至淡嶋而緣粟莖則彈  
渡而至帝世郷矣ト有テ此亦曰以下ハ上ニ引テ伯耆  
風土記ニ同ハハハ其帝世國トハ此外蕃を云テ古名ハ  
ハハ處ニ小嶋の淡洲ト云ハハ漸廣大ニ成テ其奥域  
の量知ベクハハハ謂ハハハ少彥名命此方ハ淡洲ニ  
蔭給ヒリ粟の莖實成ルヲ持渡シハハハ彼國ニ殖  
給ヒルハ其地ニ合ヒリ彼ニ嘉穀トシハ重ミテハハハ

公事不以此事李師和古  
小南米和何故字  
留之極自米和古古  
此何故青米和何故  
乃與林林不和名何故  
毛知事上皆良時也後

ハ一也我が瑞穂を貴ぶが如き又依て彼淡洲も又粟  
鳴の名有る事ハ成水ハ見由傳六引了漢籍  
淮南天文訓ハ古  
之為度并合量衡輕重生乎天道秋分粟定粟定而亦熟  
律之教十二粟而當一粟十二粟而當一寸一分一寸而為  
十分十寸而為尺云々有る粟ハ高誘註ハ粟亦穗粟  
字甲之芒也と見え亦ハ説文ハ嘉穀也ハ二月始生ハ  
月而熟得之中和故謂之禾云凡禾之屬皆ハ有る  
粟を穀類ハ主として為る故云又粟嘉穀實也ハ肉ハ米  
と有る名義集ハ禾をハ粟をハ所於て訓るハ味の淡  
しきハ依りて名ふる事右云々を考合す可なり  
後ハ大己貴命ハ少彥名命を逐て渡り坐り然ハ其  
淡洲ハ外蕃萬國と成れり事ハ大八洲國ハ成竟ハ  
後ハ一有けれハ神代と雖も途ハ後ハ事ハ其時  
ハ國造ハ事ハ始りて今猶半ハ至るるむを此

より後ハ幾淡洲ハ續合て皇御孫尊ハ所知食ハ御奴  
國ハ多く成れりむと知てハ大倭神社註進狀ハ  
引了神代紀ハ大己貴命今我當於百不足八十限將隱  
去矣言訖躬披瑞之八坂瓊而長隱常世郷者矣と有る  
此外國ハ渡坐ハ証あり又上ハ引了生嶋神詞ハ皇神  
能敷坐嶋能八十嶋者谷蟻能狹度極塩沫能留限云々  
と有る彼國ハ係ハ敷坐ハ大國主神ハ坐て淡洲ハ  
潮沫を凝りて萬國ハ為給ハ傳あり又文德天皇實  
録ハ常陸國上言鹿嶋郡大洗磯前有神新降云々時神  
憑入云我是大奈母知少比古奈命也昔造此國訖去往

東海全爲濟民更亦來歸之有少彥名命と共ニ西蕃  
より國を巡遊して東海より還給してより斯れ  
ハ外國の全ハ二神の不亮児教と宣給して放却給ハ  
ウレを素戔鳴尊此を經營給ふとして國形を九域計  
ニ成置給てりハ全クハ大己貴命少彥名命の作堅  
ニ坐て今ハ萬國と成れども其始小嶋ありし時  
の淡洲の名を以て傳給てりハ者ハ亦む有ける記傳  
此鳴ハ今吾所生之子不良と詔給てるを以思ふハ源  
氏物語常木卷ハ瓜彈を爲て云む方無しと式部を阿  
波米忌とて少一置しうむ事を申せし責給てと云  
又阿波米忌と猶明石卷女卷角終卷宿木卷又紫  
式部日記とども見えり此阿波米忌を河海救ハ  
淡忌と釋れり其意ハ親神ハ淡々忌と給ひし

故ハ淡々忌と給ひし故ハ淡鳴と云ふ可しと有  
ウ借鎮火登詞ハ吾名妹乃命能吾子見給布奈止甲  
字吾子見阿波多志給比津止申給氏と有ハ阿波多須  
も同言あり名義集又字鏡集ハ淡字を阿波志とハ阿  
波多須と訓なり ○此亦不亮児教古事記ハ是亦不入子之  
例と有と同く訓ハ記傳四三十一ハ被水蛭子ハ流  
公賜ひつれハ本より御子の教ハ入ざり事知る收た  
り故淡鳴を是亦と云ふと有ハ通えたり蛭児と云  
ハ放子ヒトガと云事ハ生産ウケと云を避給てれハ本より御  
子の外あり淡洲ハ其淡々しきを淡々忌とて淡洲と  
云るハ大八嶋國の可憐國あり事右ハ註せり如く云  
るハ依て此二ハ御子の例ハ加給ハずしと甚く其

△古事記日代宮  
 段の天皇之御子  
 等并八十王之中  
 云此三王負大  
 子之名自其餘七  
 十七王者悉別  
 賜國之國造亦  
 和氣及箱置縣  
 主也と有り此三  
 王八珍子ふして天  
 八洲國の當り七  
 十七王己の大臣  
 の降し給へり云  
 此ふ

等差を下し給へり其例二神の生坐る御子等々  
 一も八百萬神と申す計り多く坐らす事ふり有れど  
 一も**最後**に**成坐**る天照太神素戔鳴尊等三神を珍御子として  
 持齋諸神の上小立せ給へり故に自餘の諸神の臣子に如く  
 天照太神は仕奉らるる如く蛭見の御子に如く  
 嶋と成り淡洲より千萬國の出来り皇大神國の御奴  
 國の臣子に如く仕奉る可き理己に二神の國生の始  
 りり定給ふ所より不以充見敷と有り此事能當れり傳六  
 十六下又委し云々を見合す可し譬へば同下天皇  
 の御子に申せし親王より御在り坐す向へ君統の  
 御方より珍御子に授け給ふ事あるを己に姓を賜  
 ひて人臣の列に降し給ふ時ハ御父子の御會叙は無し  
 して皇親の御孫を除くせ給へ

△落山物語北  
 方如何御在り  
 けむ仕奉らる子  
 達の員ふだと思  
 さず云て落山  
 の君人數の内  
 だれも入ざれば  
 云

何方迄も君臣の御中間 若し皇御國ふり皇御孫尊天  
 多ると同ト者なり△  
 神御子と爲り天津日經所知有り大座坐せし蛭見  
 淡洲の成れり四夷八蠻の酋長共々悉くは臣從ひ参  
 來り八十船の御調を奉る可き理此より起り太神宮  
 祈年月次等祭詞に皇神能見霽志坐四方國者天能  
 立極國能退立限青雲能靄極白雲能墜居向伏限青海  
 原者棹柁不干舟艫能至留極大海亦船滿都々氣自  
 陸往道者荷緒縛堅亦磐根木根履佐久弥馬凡至留  
 限長道無向久立都々氣亦狹國者廣久峻國者平久遠  
 國者八十網打掛引寄如事皇太御神能寄奉云々

有る是即四夷八蠻共々皇御孫尊の御奴と仕奉る可  
き証あり又上引る生嶋神詞は皇神能敷坐嶋能八  
十嶋者谷噴能狭度極塩沫能留限狭國者廣  
久峻國者平久嶋能八十嶋墜事無皇神等能依左志奉  
三と有る生嶋足嶋神の外國を寄せ奉給ふ事を知  
べきあり右等ハ己マ祝詞然レバ申すハ更なる事ハ  
講義マ委レテ註カカ然レバ申すハ更なる事ハ  
るか皇大御國ハ坐す皇御孫尊ハ右り如き神代ハ御  
定マ依テ天下萬國ハ大君ハ坐セバ其御奴と有る國  
こ小ハ其部の酋長コシキころり有る君と号く可き者ハ有  
べりる如き苦の事ハ凡ハ孔丘ハ天無二日民無二王と  
云る如く宇宙萬國の中ハ於テ天皇唯一王坐テ天壤  
ハ無窮キ天統ハ傳給ハバ海外諸國ハ自帝王と僭ヒキ

號る酋長共ハ我天皇の御代官ミタラシなる事云ハ更なる  
没れぬハ吾男光胤此説を聞テ云々説有る西蕃ハ上  
古ハ三皇五帝ハ南ハ平田翁ハ説有テ我ハ神  
真なる事云ハ更なる皇國より更ハ出典ハ我ハ神  
化ハ民を治給ハる状實ハ天皇ハ御手代ハ如ク有  
あり然レバ竟奔ハるハ酋長共ハ天下を讓リ民を  
守クするを以テ己ハ任マ爲ス事ハ皇大御國ハ眞の  
大君御在ハ坐す事を辨ハ知テ故マ其讓ハ全  
ク我天皇の代官なるハ故マ是西戎ハ我ハ道ハ本  
原ハ如ク事ハ言立テ然レバ實ハ彼代官なる  
酋長ハ上マてハ甚ハ天事ハ然レバ有ル可キ事ハ  
不ハ彼ハ禪讓ハ我天皇の御奴國を預ル奉ル上ハ取  
テ宜シクハ有レドモ又其より天命マ託シテ湯武ハ  
如クある者ハ出來テ故ハ代ハ始リテ乱ルガ  
ク成ルル者ハ素クハ一姓ハ傳給ハるハ天神ハ  
御定ムルハ竟奔ハ禪讓ハ爲ス湯武ハ放伐ハ爲  
ス其代官ハ者ハ心ハ任マ事ハ眞ハ天皇ハ皇  
大御國ハ泰然ハ大坐ルセバ我ハ君臣ハ大義ハ共  
論ハ者ハトテ先ハ大龍先憲ハ子マ

日本書紀傳七

〇六十一

大御學子志深在し故小吾子と爲るを今よりハ七年  
 以前嘉永元年己未没れるを其言の愛しき任し思出  
 附く右の如く二神の美ハ一く生坐る珍御子の此大  
 八洲國ハ天神御子と坐す皇御孫尊の大宮地と定  
 水るを又不以充兒教と有る蛭児淡洲の成れる海外  
 諸國ハ各酋長有と雖も其を以て王教ハ充べり  
 づるを傳無ハ外國との者ハ知ずとも云め皇大  
 御國の大御室と有む限の人々斯る明亮ある古傳を  
 も猶も一々思へてむこと甚く氣疎く淺中一々事ふ  
 かけル但右ユ云るハ西蕃耳ある海外諸國の酋長  
 有り此下ある太占  
 の件ハ註ふ可し

故還復上詣於天具奏其狀  
 時天神以太占而卜合也乃  
 教曰婦人也辭其已先揚乎  
 宜更還太乃卜定時日而降  
 之故二神改復巡柱陽神自



左陰神自右既遇之時陽神  
先唱曰妍哉可愛少女歟陰  
神後和之曰妍哉可愛少男  
歟然後同宮共住而生兒號  
大日本豐秋津洲次淡路洲

次伊豫二名洲次筑紫洲次  
隱岐三子洲次佐度洲次越  
洲次吉備子洲由此謂之大  
八洲國矣瑞此云彌圖妍哉  
此云阿那而惠夜可愛此云

哀太占此云布刀磨爾

故還復上請於天具奏其狀云々古事記云々於是  
二柱神議云今吾所生之子不良猶宜白天神之命所即  
共參上請天神之命云文有り其ハ引續きて直ふと云意あるを  
此唯上文を受云所あるハ故小故云々云々之ヲ還復  
上請於天ハ此始ハ御天降為降座ノ御の事を慥ハ云水ぶれども  
降居彼嶋ト有ク其即天ノ降坐シ証ス此文ハ引  
合せて其然ク所由をハ知レ者アリ然レハ宜シ汝ニ往  
天降ル事アリゆレ故ニ此ハ其往ル對シ還ルハ書キ者アリ  
者アリ天孫降臨章第一一書ハ勅天鈿女曰宜往向

命神出生章第  
十一ノ一重曰然  
後復命其言  
其事と有り  
此と同一文あり  
傳十四卷百九丁  
の云々

之レ有テ下ニ天鈿女還  
詣報狀ト有テ同格ナリ今古事記を以て此の意を補  
ハむトす於是二柱神議云々ハ二神此天柱を往巡  
少坐て相遇給ヒ時ニ彼唱和の御事有リ少陰神  
の御言先立給ヒるハ男女の理ニ違ハ少依て女人  
先言不良と陽神の宣ヒふク故言給ハずシ御合  
坐シハ竟シて蛭児淡洲を生給ヒる故ニ愈其御過  
多ク用幣流之國と勅任シ給ヒる大御旨ニ違ハるを  
以て如何ニ為スと交ハ神議ニ給ヒるハ陰神  
の御言先立シ外ニ指テ其故ト思フ依テ事

崇神天皇七年御紀  
於天皇乃幸神  
淺草原而會八十萬  
神以向之是時神明  
憑侍遊之日百餘  
言天皇曰教如此  
者神也答曰云是時得  
神語隨教奉祀也見云

の無し一ハ猶天神の御許ニ參上り坐て其有し状  
を聞之上て左ニ右ニ其御命を請奉りて其大御趣り  
ニ從ひ奉給はばやと思ふし成ぬる事即此なる故  
還復上詣於天具奏其状と有る是なり二神の其有て  
思ふし巡り給ひし事右の御言先立の御過よ  
の外に思ひ合ひ給ふ事無しハ之を猶天神の御所  
小奏さし給ふ事少くも情進を加給ふ事無しハ天神  
の御命の隨ひ物爲給はば思ふし御事あり孝徳天皇御  
紀の神奈賀良の言に隨在天神請天神之命とハ其首  
の四字を書水たるを思ふし請天神之命とハ其首  
小天神諸命以て見え此ハ天神謂伊弉諾尊伊弉册尊  
曰ふとハ如く天神の御給ふ御言より例公古事記訶  
此宮小建内宿禰居於沙庭請神之命於是教覺詔云と  
改太后歸神言

此ハ此ハ神語と有る其ハ神教と云ふ事也

又見又諸神の  
御託言等々の御  
在し坐けり所  
時得神語隨教  
而祭とも書し  
れ欽明天皇十  
六年御紀小昔  
在天皇大泊瀬  
世云於是天皇  
命神祇伯受策  
於神祇祝者也  
託神語報曰云  
又皇極天皇  
三年御紀小至  
等云々陳神  
語入微之説と  
又至聖觀等遂  
詐託於神語  
曰云々と有る  
万葉十九卷  
位者伊都久  
祝之神言等  
行得毛來等毛

此ハ此ハ神語と有る其ハ神教と云ふ事也

亦建内宿禰居於沙庭請神之命於是教覺之状如先日  
云々爾具請之今如此言教之大神者云々故備如教覺  
と有る神之命より此を仲哀天皇御紀ハ天皇聞神言  
有疑之情と作る其を受て神功皇后御紀ハ天皇不從  
神教と有るを以て請天神之命ハ請天神之教と云ふ等  
し事事を曉る可し孝謙天皇御紀小天平勝宝七年三  
吾不願矯託神命と有る神託言を神命と云ふ事  
又神護景雲三年九月云々初大宰主神習直阿曾麻  
呂矯八幡神教言云々勅曰宣知清麻呂相代而往聽彼  
神命云々大神託宣曰云々清麻呂來歸奏如神教と有  
る此を以て神命神託神教共ハ一なる事を知べき事  
し侍其より前ハ聖武天皇御紀ハ天平十四年十一月  
壬子大隅國言云々空中有聲如大鼓野雉相驚地大  
震動丙寅遣使於大隅國檢問並請聞神命と有る神護

○日本書紀傳七

○七十一

此ハ此ハ神語と有る其ハ神教と云ふ事也

元年八月庚寅  
朔辛卯使雅樂  
頭從五位下伊刀  
王受神教於位  
吉神又

二年六月大隅國神造新嶋有聲  
の可し其ハ先仁天皇御紀ニ宝龜元年十二月甲申云  
神護中大隅國海中神造嶋其名曰大元持神と云  
事ハ有ハ初ヨリ神教ハ無クシテ神名を定むる事  
の事ハ有ハ初ヨリ神教ハ無クシテ神名を定むる事  
因ヨリ引 備此ハ隱身ト顯身ト界ヨリ神ト人ト分る  
始ヨリ其ハ天神謂伊弉諾尊伊弉册尊曰云々ハ二神  
の未天降坐ぶる間ノ事ハ二神ハ素ヨリ隱身ヨリ  
坐しを己ノ天降坐テ共爲夫婦ト給ふ頃ニ至テハ男  
女ノ形容備ヨリ坐テ現大神ト成給へるニ依テ天神ノ  
隱身ヨリ顯身ト成給へるハ神言を直ニ向テ給  
ふト雖モ元ノ隱身等ノ如ク委曲ノ物爲サセ給ふ事

事小因テ

あど御心行ク迄ハ難成ヨリケル故ハ天神ノ御命以  
テ太占ト云事を始給ヒ其太占ハ令ト相給ヒ其ハ象  
少テ天神ノ御情を彰ハシ示シテ事教ハ悟テ給ハ少  
シ者ヨリ 但祝詞ハ皇祖神漏岐神漏美乃命以此云々  
ハ有ハ天神ノ顯身ト現山坐シ神議トセ給  
ふテハ非ズ者ヨリ 然ルハ許計ヨリ尊ヨリ二神ハ坐セ  
ハ素ヨリ隱身ト成給ヒテ天神ト御言語ト爲サセ給  
ハむ事ハ難クハ非ズ又天神ノ御上ヨリハ顯身ト現  
以給ヒテ二神ト共ハ神議トセ給ハむ事ハ又難クハ  
ハ非ズ今二神ハ初任ヨリ天降ト給ヘルハ顯國  
を建テ顯見蒼生を置給ハむ其事ノ最初アタリ依テ

○日本書紀傳七

○七十二

二神の今還り上詣給へるふは神と人との差別を立  
て太占を以て事教覺し給へり者ふは其天神の御  
心を恐在水ども思則り奉るふ今ふも頭固の成て頭  
見蒼生の出来れりむふ就ては神と人との其思有て  
相混同す可くぬを有て在ゆ其事業不就て天神  
の御心を知り將欲く爲り然計りの事を其度毎ふ  
天ふ昇りて奏さむ事の甚近瀾あり故ふ天神の御命  
以て太占の事を授給ひ其御自事教へ覺し給ひむ事  
を太占ふと合て眼前ふ天神の御心の彰るる状を示  
し悟し給へり者ふは是亦天神の皇産靈あり所ふ

少然れば古事記も爾天神之命以布斗麻迹尔ト相詔  
之因女先言而不良亦還降改言と有ハ天神の太占を  
授け給ひて其兆文も御心を合せて此兆々云々神  
命予此文ハ云々の神教予と直も教給ひて此後ふも  
二神の御上も天神の御命を請求も將欲く思ふも  
むふハ此事を物爲させ給ひて其兆文も出る天神の  
御心の隨ふ行給へて云事あり  
其例ハ中臣壽詞ハ天  
忍雲根神速天乃二七  
尔奉上は神漏岐神漏美命乃前仁受給岐申仁皇御係  
尊乃御膳都水波宇都志回乃水仁天都水速加五奉年  
止申世止事教給志仁依互云々神漏岐神漏美命乃前  
仁申世波天乃玉櫛遠事依奉互此玉櫛遠刺立互自  
日皇朝日照万氏天都詔戸乃太詔戸言速以告禮如  
此告波麻知波弱産仁田都五百董生出年自其下天八

并出年此遠持天都水止所聞食止事依奉支と有る  
其天八井を出して天都水と爲給ふ事り神瀧岐神瀧  
美命の御心より其神業多し物々此天都水を乞  
ふ其度毎二天上に参上て受賜はる事り甚便無し依  
て天乃玉拂を依給ひて云々の事を爲さば其合也  
て天都水を下し賜はむと事謀り定て依し給へる  
其理一然らば天地の存際の内二無く勝山奇  
く貴く坐らす天神の如何ある事り知る世給はざ  
む大御身自の御心の隨に定て行り世給ふ御事なり  
心直に御命令せ給ふ可し事を太占を事依し給ひて  
其天神の御情其合に出る状を教給へるより二神  
の神功既に竟て天に復命し給ふ迄の其間天神の  
御命を請求め給はむと云ふ此太占を以て下相給へ

少少第為書工邊將  
合文而不知其術時自  
鶴鶴飛來指其首尾二  
神見而學之即得定道  
と有ふと即太占の例  
あり此の如く

と御事不言文の簡易なるに依て天神の御占を  
物爲給へる状に見ゆるに依て古今一人に其説  
を得る人の無き者あり記傳四に抑異神のト向  
あま可けりか謂はるるを今此天神のト下し給ふ何  
般神の御教を受賜ふる疑ふ人も有らば其漢  
籍意より古の意はて違へり云々天神の命以てハ  
天神の御親に給へる事り天神の命以てハ  
云々右の如く文に在る心著し二神を合給ふ  
故に右の如く文に在る心著し二神を合給ふ  
外に知らず此宇宙の向ふて八百萬千萬神と神等の甚  
多く限無く坐る中其大御祖と坐る天神の御心  
何れ足らぬ所有り何れ神の御教を受給ふ事り寫  
む此天地の萬の物に事り依り産靈の御靈に依り  
成出る者と始て見定る事り此大人す此所の  
頭を推り得るは女者を況て其餘の人の如何なり  
知る事り右の因女人先言而不良とい其占北に出た

天神の御心あり其の先ふも宣へる如く女人先言不  
良との己は伊邪那岐命の御心の情は在し事あるを  
天神の御情也 因女人先言而不良 其如く出たりし故に情と情とを合  
せて其下の善しく趣く方と就て行ふ可き條理の彰  
はる是即下相あり ウラフ 借此時の御占の鹿トあると未  
有ぶ少し程ありけむ如何なる御占ありけむ知て  
るぶ此とて御心の御占を以て正定と思定め給ふ可  
き甚と奇しき神術こり有りぬ玉小櫛五十六の薄  
雲卷は賢しき人の心の占共にも物向らせむと爲る  
よしと有る下は古今集に如此戀ひむ者との吾も思

ひよき心の占正しくありけむと云歌を引て心の考  
るを心の占と云ふと云わくは如く此方ふの女人  
先言不良と云ふ御心の占あるを天神の因女人先言  
而不良と因て御子の良ハしく生たるありし宣  
へるふも天神の御占あり此の太占是なり然れば布斗麻迹  
尔の尔ハ堅石尔常石尔と尔ふて鹿トを太占と  
云ふ其太占と云物して下ふ如くは御情を合せ給  
ふと云義あり可し 記傳四上は伊邪那岐命の女人  
先言不良と詔へるハその言先立  
事の宜くぬあるを此の生給へる御子の宜くぬを  
指して詔ふあり因て女人先言而不良と云ふも同語  
ある指事異あり因て有る以辨ふ可しと有る誠  
可美と説ふるが此説は依て御心の占を考へ出来

々ありは此に彼に我今説出る事の如くありと云  
以て行けは皆鈴屋大人の恩賜と云者あり上件古事  
記に此傳と少異ある所有る依て  
餘り言痛きまじ云論ふふむ  
○時天神以太占而  
下合之此文の任して天神の太占以下合給ふ状  
不聞かれども然し非ず二神の具に其状を奏し給へ  
る其御答を太占以下合して示し教給へる事上云  
るが如し然し太占ハ二神の成し給へる事其  
ふ事の著明なる事なり  
○太占下ハ太占此云磨尔と有り  
天孫降臨章第二一書ハ天兒屋命主神事之宗源者也  
故得以太占之下事而奉仕と見え古事記ハ右の如  
く布斗麻逆尔ト相而詔之と有り  
又玉垣宮段ハ布  
斗摩逆尔ト相而求

又行來ハ麻布と向  
義ハ事ハ二書  
ハ事ハ二書  
ハ事ハ二書

何神之也尔崇出雲大神之也心  
と有り其外ハ見當るが  
布刀ハ記傳四 三十一  
布刀詔戸布刀玉命まの布刀めて祢辞ふり」と有る  
如し磨爾の磨ハ上十五  
説多麻の麻は同トハ真  
の義にて神靈を云由より爾ハ  
似あるが此二言を合  
せて天神の神隨の道は順後ふ事を隨と云は其ま  
し上下ハ活機ハ學と云ハ隨並ふて向ハ在事の如  
く我も爲て向の物ハ並ぶ由より眞擬と云ハ向ハ正  
眞の物有る我ハ成し其眞の物ハ如く爲る由より  
大旨右の如し  
又此を麻知しハ三ハ眞路の義より神  
事ハ天孫降臨章第二一書ハ下より事ハ  
く云ハ此ハ其傳ハ純ハ曉る可なり  
○ト合之ハ

神事之宗源者也



古事記ト相而ト有を記傳四三十一ト宇良阿良ト訓  
ト一万余十四七ト武藏野尔宇良敵可多也伎ト有  
宇良阿良宇良阿良ト其阿良ト令合ト約ト然ル  
ト然ルハ宇良阿良ト令合ト云事多ク凡テ古書  
トト有ク其所ト使様ト因テ言ト活機變ト多ク先  
宇良ト云ハ其言ト體言ト多ク其宇良を爲を用言ト  
活ト時ト宇良布ト云ハ是宇良阿良須ト云語多クハ  
約ト然ル布ト活ト宇良波年宇良阿良ト云ハ  
又其用言ト宇良阿良を居テ體言ト爲ルト有ク万余  
十五十ト保都手乃宇良敵宇可多夜伎互ト有ク是

ふウ此ハ宇ト有ルハ體言多ク又宇良那布ト云ハ一  
の活ト格多ク万余十一十三ト玉梓路往古占相云ト  
此ハ賂を爲トを麻比那布ト云類トトを爲を云ハ  
ウ備又トを爲ト北ト見ハれ出タルを宇良阿布ト云  
ハ漢文ト是をト食ト云ウ備上ト宇良布ト此方ト  
ウ合ト事ト云是ハ彼方ト合ト此令合ト合トト  
別ト能辨ト可ト備其宇良阿布ト食トト食トト別  
有ト以ト有ト通えナリ但此ト宇良布ト天神ト御  
上採要ト  
心ト二神ト御情ト合トるガ北ト見ハルトトト後  
トトト事ト爲テ此方ト合トを宇良布ト耳云カ如  
トふれトト此トト彼トト合セ合カ即此トト合  
ト是ト古事記トト相而ト然ル事ト上トト合

云々が如く此のトに至て古人の説と重なり  
思ふ所と本より大に異なりハ悉く合難ク  
曰ハ天神の御命の太占に見らるる其即神の御教あり  
其ハ神言以て諭し給ふハ太占以て教給ふハ其ハ神  
命より事ハ同トを殊ニ此ハ太占ハ初より有けれ  
ハ其北の見る共ニ直ニ御言を添給へるか故ニ  
古事記ハ天神之命以布斗麻迹亦ト相而詔之云々  
と有るハ神武天皇神紀ハ夜夢天照太神訓于天皇曰  
の訓字を同ト訓るハ表訓と懸る字あるハ故  
あり借上ハ古事記の請天神之命と有文を引て註せ  
る如く此の教 借教の字を 新幣と云ふ其語を此  
ハ被用りるハ太占の麻迹ハ學を麻耶夫と云同語ハ

るが學と教と相對して甚く妙あり若て其學ハ擬ぶ  
よて受る方より云語あるを教ハ食經ハ授る方よ  
り云語あるが袁斯ハ食國天下と云い又聞着る万  
葉十八ノ伎己之字須と云い又食物と云ふ食よ  
て身よ受入る語あるが幣と云布と云布流とも活  
時ハ授與る方より食ハ經て受る方より行へ語と成  
るハ古事記ハ亦ハ十神謂其菟曰汝特爲者浴此海壙  
と有る如く其特爲を人よ 然るを此教字を阿邊波比  
氏と訓るハ名義抄ハ此を稽ふるハ耶良布とも志流  
須とも袁斯布とも有る然る訓ハ魚を阿邊波比氏と

訓るハ却て古訓より可く所思なり味ハ多クハ物を  
嘗試して其美醜を判り意あり然レハ太占以て御卜  
合セ給へ事ハ成行を天神ヲ教給へるを云ふなり然  
を通証ニ教之爲言天地合也天地合而萬物生陰陽離  
而萬化煥生則有味想則無味所以訓無道爲無味氣也  
と云ふ多クハ言痛ク理  
○婦人之辭其已先揚字此  
てハ太占ニ見ハる北を見行して婦人の辭先ニ揚  
りるりと疑給へるよ其奏其狀と有レハ辭先立る  
事ハ思へるハ素より所知食事ふるを字字ハ如何  
と書様より  
字字ハ論語ニ未注ニ字疑未決之辭と  
有レ意ふハ此工ハ叶ハバ者あり  
但此教字を味ハふ義  
然レハ古事記ニ因女先言而  
用へる故よりヤ有む

不良と詔へる意味を以曉り明らむ可し此を以て婦  
人之辭を正書の例ニ倣ひて多和夜賣能許登と訓  
之其已先揚字を其已尔先立氏揚多留加毛 登詔給比  
既と訓り然らば宜更還去と有へ續らざるが故  
ふハ 記傳ニ引レらるる婦人之辭其已先揚字の訓  
を袁美那能許登佐紀危都辨志夜と有りて甚ク  
美レクハ有レども  
○宜更還去ハ宜更尔還去と訓  
て下ニ登詔比氏と訓添へる古事記ニ亦還降改言と  
有ると同ト所あり然らば此ニ改言と云事ハ無ハ先  
巡柱の次第違へるを次より巡柱をも改さし給へ  
る事ハ有ると一ふし云故あり  
然レハ此の天神  
の神言あり婦人之

公此之神日復更夫天  
降坐于天柱先の如行  
巡りて時日を見時  
ハ初無可一故元ハ  
際其時日ハ天  
柱を柱巡りて時日  
事と定て其義を見  
ハ云ふ所也

辞其己先揚字と有て巡柱の  
事無水の打合ぬふ如かり  
ト予漢文の潤色より此等の事ハ餘りある事不と云  
水たどが如く此国土に在り事あるむふハ似着ハ  
くも有ぬ天神の御許より何を以て時を割と分け又  
何を以て日を計ふ事の有む然るハ天とハ世を照  
す天日ある物は何れも光を受て日と云事の有む  
壽詞ハ月内仁日時遠撰定候と有ハ高千穂宮の事ふ  
ルハ然も有て予由中臣壽詞講義云云ハ如く神功  
皇后神紀ハ皇后撰吉日ハ齋宮と有ハ後ハ神祭  
ふハ日時下定有る事常あり万葉十秋雜歌七夕を  
詠ら中ハ擇月日道義之有者云ハ  
詠物ふれハ今云ハ限ハ非ず 然れハハ歳月日時  
と云事ハ已ハ天地の相分れハ初より既ハ在ける事

云く更あり天神の靈威ハ依て天先成て大虚の中央  
ハ位ハけハ其相混在たり故を以て其天日の氣  
ハ牽ハ乍ハ其周圍を廻りて地後ハ成定るハ其公運  
ハ一歳と云ハ私運を一日と云ハ月ハ亦ハ三十日許  
ハ一ハ大地ハ屬あがハ半ハ缺ハ半ハ満て元ハ復る  
ハ大地ハ公運ハ合ハハハ十二計ハ一歳あるハ  
又其私運ハ日光ハ向ハ向ハ晝と云ハ日光ハ背ハ  
向ハ夜と云ハ須臾ハ止時無く甚敏捷ハ依て時と云  
ハ十二ハ割とて其元ハ復るハ一日と云ハ然るハ日  
神月神ハ生坐ざりハ向ハ日月と云事有てけりずと

思ふ人々有べしれども其日月共小此国の状なる所  
ありて日神月神ハ其を所知看す神ト申す事ふて皇  
御孫尊の国土を所知看す同ト事あり然れハ天地と  
分れし後ハ日神月神の生出坐より先ト雖も歲月日  
時の運行ハ元より有けり者あり己ハ蛭児の事を回  
神出生章ト雖も三歳ト有り日月の運行無くハ何を  
以て一歳ト云事を得む然れハ月の判れたる事を此  
より後ト如く云々三大考及靈眞桓等の説ト亦諾む  
難かり然れども此ト定時月ト有ハ天ホテの事ハ  
時ト云ハ其照し給ふ日月の方トあり云々事ハ日  
月の運行を望見ス此国土ト於て云語ある故ト愈以

公從ひ又上を降降を  
阿蘇久理理稱と訓  
るを小

お合ぶ  
者ぞ  
○降之ハ天降志給此伎ト訓て一通證ト延佳  
曰降之當訓阿未久多之多未布天神之宣也舊讀誤ト  
有ハ依れり古史徴ト引れたるハ降之を久太志多  
麻布ト訓れたるハ然る言ふれども誤ト  
有ハ舊訓阿蘇久理理ト  
有ハ振と爲てき者なり  
○備此ハ陰神の御言先立  
しハ小依ト其御過不肖ト蛭児淡洲ハ成れりトハ  
二神の天神ト奏し其御教を受奉給ひ其御教ハ依  
て次度ハ御言の次第を錯乱給ハ善ハト文ト  
唱和して大八洲国を生給ひ大ハ神功畢ト御徳ト  
至り盡さし此神業ト依て又神隨トハ眞理有テ萬  
國を御ふる神道を吾見出たり其ハ先蛭児ト淡洲の

夷狄が性情と皇大邦國の公民の性情と別あり變  
あり其蛭兒の事景行天皇御紀に朕聞其東夷也識  
性暴強凌犯為宗村之無長邑之無首各貪封塚並相盜  
略亦有邪神郊有菽鬼遠衢塞徑多令苦人其東夷之  
中蝦夷是尤強焉男女交居父子無別冬則宿穴夏則位  
操衣毛飲血昆弟相疑登山如飛禽行草如走獸承恩則  
忘見怨必報是以箭藏頭髻刀佩衣中或聚黨類而犯邊  
海或伺農桑以略人民擊則隱草追則入山故往古以來  
未染王化と有之是して蝦夷嶋の習俗又彼地の毛民  
等が性質を宣へる者あり 此東夷と云ふは彼蝦夷の事  
ありを先輩多く我が東北

の國なる由云々其古彼嶋の毛民多く  
此地方を略し居し程良し其水は穀く事有し故に  
其以來の東北の諸國不て穀く者の名は如くあり  
其差別を知ざるを以て混れたる説あり己は生嶋神詞  
講義より云々又其却紀 又淡洲の成山は外國の  
中不して我西蕃多赤縣州多殊は勝れたる國也  
と故に自高國の中華と誇稱する其て人性惡く  
しけり其易緯乾鑿度云々孔丘が言ふ上古之時人  
民無別群物無殊未有衣食器用之利於是伏羲乃仰觀  
象於天俯觀法於地中觀萬物之宜始作八卦以通神明  
之德以類萬物之情故易者所以述天地理人倫而明中五  
道是故八卦以建五氣以立五常以之行象法乾坤順陰

陽以正君臣父子夫婦之義有か如く彼土の大古の  
人民穴居野處して禽獸の群を成し五倫五常を知らず  
わし故に此を教へむと爲す蠢蟲愚れ難諭るわし  
ハ八卦と云物を作り象教を以てして漸く人道を令  
知れり由り聖人の國と云ふは如此し況て其佗  
西夷八蠻の人性想像不可し 直日靈は異國の天照太  
少荒振神所を得て荒ぶるは依て人心悪く習俗乱  
うかかしくして國を以て取つれば毀れし奴も忽ち君  
とも成れば上と有人の下あるは奪はれしと措  
下あるは上の隙を窺ひて奪はむと謀りて交るは仇  
みつゝ古より國治まり難くも有はる云ふは云れ  
つゝ如く外國の人情の美つゝは彼淡  
洲ありが 右の如く蛭児淡洲の人性の神隨の道は冥  
故あり

りて其行ふ所は美はしうらぶるは如何と云ふは陰神  
の御言先立坐し御過は依て成れる國あるが故に其  
土は生るゝ人の性と成りて世と共に易ぶる者あり所  
以て男女別無く君臣相及く事止ぶる是外國の常ぶ  
り彼唐戎の如き湯武の篡奪より始めて己は春秋二百  
四十年餘の間は臣より君を弑たる者三十六人婦  
より夫を殺せる者亦量ふる計あるは二千年餘の  
今に至る迄其教幾計とも量知てらるるが如く右の  
如く人道は闇き耳ふるが如く人亦柔弱ふりて神武なる  
ざるは塩沫の凝成れる淡洲なるが故に其土質は感

△白王國のト云ふ  
神隨言變せぬ  
國と云ハ元來道  
一ト云言立六爲  
ざれとも天地固  
有の大道其中心  
在て行ふト云故  
小其議論無キ  
事白書示燈を  
取ず暗天小笠  
を著せしむが如  
く少して書典  
を編み道ト云  
事書を云者ハ

ハ一字不通の者ハ方テ言行正ト云テ徳義薄クふるハ外夷の國トハ表裏の事あり

けり故あり  
眞野時繩説ハ其國其土地の靈の脚  
氣を得て産生するハ故ハ地宜方物各々其性を異  
ナ産土神ハ是土地の靈なるハ大八洲ハ各自の國魂  
神有ハ一回ハ國魂神ト云ハ一處ハ産土神ト稱  
ナ地勢方角ハ隨ハ其靈異なる故ハ方隅不産の物  
有ハ人又容貌志氣ハ不同有ハ是皆土地の神靈の寓  
ナる所有ハ故ありト云ハ愛ハ説ハ我説ハ合  
ナる者  
故其御過ハ有テ良ハざる御子の生來た々ハ依  
テ二神天上ハ昇坐テ天神の御命を請求ハ洽ハ太古  
の御教を受賜ハ坐テ其事を改メ正シ洽ハ此即萬  
の外國ト云ハ人身ハ固有ハ神道無ハ故ハ佗の教  
訓を得テ始テ道有ハ師弟ト云事ハ起テ基本是ハ  
所以ハ漢ハ儒ト云テ教有ハ梵ハ佛ト云テ教有

△殊ハ西戎ハ國  
を治むト云ふ經  
書ト云者有ハ  
其經術ハ一  
度ハ革命す  
も國風ハ合セテ  
立テ道あり  
けれハ天下の大  
經トハ云べし  
一も一家の私法  
ハてハ公法ハた  
る國を以テ佗  
の國ハハハハ  
策ハ過ハる者  
あり豈聖ト云  
キ事ナラヤ

少其餘の國ト云ハ教法ト云物ハ有ハ皆其土地の自  
然ハ叶ハテ人を教起す爲ハ作爲ハ故ハ其國ハ  
相應ト云ハ佗國ハ難ク又行ハテ却ハ害を妨  
ム少ハるハ其教ハ其國限ハ事ハ有餘不足無ク  
設備ハる者ありハ故ハ然レドモ老子ト云書ハ大  
道處有仁義知慧出有大僞六親不和有孝慈國家昏乱  
有忠臣ト有ハ如ク其實ハ國ハ道無ハ起ハる事ハ  
其耻覆ハ不可ハざる所あり  
直日靈ハ異國ハ威  
力有ハ智深クテ人を懷  
けハ人ハ國を奪取ハテ又人ハ奪ハるハ事量ハ能ハ  
暫時國を能治メテ後ハ法トモ成ハテ人ハ戰ハ  
聖人ト云ハ警ハバ乱ハる世ハ戰ハ習ハ故  
ハ名將多ク出來ハカ如ク國ハ風俗惡ハク爲ハ若ハ



難きを強し治めむと爲るべく世々其術を様々思  
巡り爲習ひたる故然賢子人も出来つるありと  
云意味大なり所以其外國は各酋長有て私王と僭  
號し居る事ふら有れども其王と云者能人を教て趣  
る者の威カも強く盛ふ成る故自然其國の君主  
の如く成れども其實蠢愚の民を教導し師ふ  
る者多し上古より此傳り有つる故伏羲より以來  
夏代頃迄の王者と云るか天下を家し其子も傳  
ぶる者多きや彼土も傳る神道の神道なり然るを夏  
殷周と徑行く内父子相傳る隨ふ天下を一人の天  
下の如く成せらるる其が心は任する隨ふ夏桀殷紂

△西戎ハ右の如く  
かて天子之元子  
士也天下生而貴  
者也と云て聰明  
ある人を天子  
と仰き尊む作  
法ふる小依て君  
たる者不道か  
て臣下小聖人も  
と云者有れば臣  
として此を篡  
弑し子若不肖  
おれば他人の位  
を譲りて革命  
を事と爲るを  
人此を怪しき  
ら君臣の義  
本より輕くし  
て假小主従と成  
れる如き謂れ  
有ればあり

の輩出来りて民を苦しめたる素より民は師父の  
道を失ひ又我皇神孫尊の御代官たる事を忘れたる  
所爲あるに依りて天神の御罰めも過奉れり然る  
を其時殷湯周武ふと云者下より起りて篡奪の事を  
行しりしに實は其罪適に可くざる大悪人なりと  
雖も素より天神の御心は王者として世を御むる天  
子は非ず民を教へ趣く可き爲り師として給ふ所ふ  
水は主従と云耳より眞の君臣と云ふも非ず民心  
の歸くを任ねて天神の暫時彼等を酋長たりしめ給  
へるあり如此く教へ固まれば治るざる國風ありと

公より彼不<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>教  
 有<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>怪<sup>シ</sup>思<sup>フ</sup>法<sup>ヲ</sup>洲<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>  
 於<sup>テ</sup>神<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>大<sup>ニ</sup>八<sup>洲</sup>國<sup>ト</sup>  
 自<sup>ラ</sup>體<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>す<sup>ル</sup>事<sup>ハ</sup>  
 神<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>天<sup>皇</sup>尊<sup>ヲ</sup>天<sup>ノ</sup>  
 神<sup>ノ</sup>初<sup>ニ</sup>任<sup>シ</sup>奉<sup>ル</sup>給<sup>ヒ</sup>  
 天<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>大<sup>君</sup>と<sup>シ</sup>奉<sup>ル</sup>事<sup>ハ</sup>  
 彼<sup>ノ</sup>自<sup>ラ</sup>立<sup>テ</sup>稱<sup>ス</sup>事<sup>ハ</sup>民<sup>ノ</sup>  
 中<sup>ノ</sup>より成<sup>リ</sup>上<sup>ル</sup>我<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>  
 差<sup>有</sup>り<sup>如</sup>か<sup>ク</sup>  
 谷<sup>ノ</sup>重<sup>ニ</sup>遠<sup>ニ</sup>説<sup>ク</sup>  
 而<sup>シ</sup>土<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>建<sup>國</sup>以<sup>テ</sup>纂<sup>ニ</sup>  
 統<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>是<sup>レ</sup>聖<sup>ニ</sup>聖<sup>ニ</sup>聖<sup>ニ</sup>  
 禪<sup>讓</sup>之<sup>レ</sup>美<sup>妙</sup>然<sup>レ</sup>非<sup>ズ</sup>  
 天<sup>地</sup>常<sup>經</sup>是<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>  
 以<sup>テ</sup>代<sup>ニ</sup>敷<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>來<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>  
 姓<sup>者</sup>三<sup>十</sup>氏<sup>以</sup>叙<sup>ス</sup>  
 書<sup>者</sup>二<sup>百</sup>事<sup>獨</sup>  
 佐<sup>生</sup>君<sup>臣</sup>之<sup>レ</sup>  
 邦<sup>何</sup>苦<sup>信</sup>外<sup>國</sup>  
 之<sup>レ</sup>説<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>ハ<sup>然</sup>る<sup>言</sup>あり<sup>也</sup>

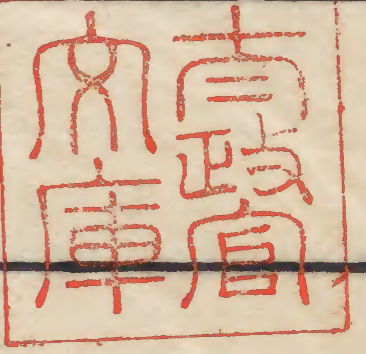
又其教多者の上も然る曲事有て古今の向ふ  
 安き時無く如何にも頑く<sup>クネク</sup>一國風ふるハ右の沛言  
 先立の事成就て上下の人性の離れざる邪徑有る故  
 然るを古より世々の識者良し爲りハ皇奉と西  
 戎の國體を論ひて世々の沿草を云事あるれども  
 外國の酋長共ハ我皇御孫尊の御代に仕奉りて民  
 を教趣科置給てり者多事を得知ずて何  
 時治乱典廢を云我と彼とを並稱ふ事我皇御孫  
 尊に對奉りて餘は輕く<sup>ク</sup>無禮事ありハ吾輩能  
 慎しむ可此ハ相反對して此大八洲國ハ二神  
 の次第違はず唱和せる御心の睦びより生成坐る皇  
 大御國多し依て可憐御國多事ハ申すも更なる  
 大御堂として國內志は在と有る人草ハ皆天神

公を又三行の事靈  
 之所佐國叙し有り  
 其は此

地祇の御裔は爲て外國より酋長と雖も蠢化の民の  
 孫多とハ天地懸隔の差有る事今更み取出て云心  
 事ありぬども万葉五十三の神代欲理云傳久良久  
 虛見通倭國者皇神能伊都久志吉國言靈能佐吉播布  
 國等加多利繼伊比都賀比計理と有ハ決りて神代よ  
 りの古傳ふるを歌序に置る者あるハ伊都久志吉國  
 とハ天孫降臨章の故皇祖高皇產靈尊鍾憐愛以崇美  
 焉と有る憐愛の事あり大八洲國を珍子と崇美給ふ  
 義あり言靈能佐吉播布國ハ二神順次宜く唱和  
 給ふるに依て可憐御國の生れたるに起る古傳ふ

し然る故に常も目馴て然る可憐御国を我も人  
も共思えされども追々外国の事の明々も不成以  
行に随ひて天下に二無く尊き御国なる事も知れ  
又天皇の天日の如く天下に照足はしき畏く坐御事  
も知れ又天下の大御室の風儀の君子さびて美に  
く好ひし事も知るるに随ふ古よりの未其所在を云  
ざりし蛭児淡洲の海外諸國なる事を予始て右の如  
く説得て見れば御子の教も入れると入ざるとの差  
別如此く判然ありて更に強でるる者あり直日  
世向は生とし生る物鳥虫に至る迄も己が身の程と  
も必有てし限り業の産巢日神の御靈に頼りて自能知

て成す者ある中にも人の殊勝なる物と生れりれ  
ば又然勝れざる程に随ひて知べき限り知り為て  
限り為る物あるや如何なり其上を猶強き事ありむ  
教に依りて得知す得為ぬ者と云はば人の鳥虫は  
亦此の如く鳥虫謂ひ仁義禮讓孝悌忠信の類皆人の  
の必有りて業ありは有りて限り教を借るれば自  
自能知て行ふ事ありは云はば皇大御國  
の人情の有りて限りて甚く愛た然れども外國は  
然らず素より人の性質は美善一性無か故に教へ  
ずて道を行はれぬを教へも獨行ひ得たる人の世  
にも一人は性有り故なり又十三下葦原水穗國  
然り邪一性有り故なり又十三下葦原水穗國  
者神在隨事舉不為國と有る事言ひて彼道より  
言舉ハ為されども神隨ふる神道の備りて自下行ハ  
る由り古傳あり又其九下蜻鳴倭之國有神柄  
跡言舉不為國と有る其神柄と神在隨と同一事ある



か孝徳天皇御紀は惟神者謂隨神道亦自有神道也  
 有る是より惟神の隨を行ふ事あるが其を神道と云  
 る其神道といふ上は天神の宜汝往而循之と有る天神  
 の勅任を云事あるを古事記は修理固成是多陀用幣  
 流之國の天地古今萬國は貫通る天下の大道是なり  
 然れば能其有べき隨を行はざるを惟神と云古語の  
 有るは皇大神國の人性の固有<sup>モヨクア</sup>識神といふ四夷八  
 蠻の未回より且ては備はざる者あり若し惟神と  
 在の義より神道を行はし自神道の中を謂ふは漢籍  
 論語は禄在其中辭在其中直在其中仁在其中と有  
 る語の様は能似たり此惟神の語を自然と云事の如  
 く説くは非ざる可し當は然焉べし事を然焉を云り

明治七年七月十一日  
 菅政友

